



いきいき! いきいき! 仲間たち

まちづくりは人と木づくり。多彩な活動で地域を元気に
「平井を明るく豊かにする会」 **山口市**

20世紀から21世紀へ 時代を貫く棒のごとき活動と次世代への思い

澄み渡った空が気持ちの良い秋の日。山口大学正門から伸びる「山大通り」では、伸びやかに枝葉をつけたけやき並木が紅葉し、道行く人の目を和ませています。

「このけやきを風格のあるものに育て、文化遺産として次世代に残したい」
山口市平井地区13自治体1,100戸で構成している「平井を明るく豊かにする会」から発信する豊かなまちづくりは今、住民、大学、行政をも巻き込んだ、まち全体を動かすムーブメントを起こしています。



肥料の特長と効果の説明にメンバーも真剣な表情。



作業は半分けて予干バキと。

通り過ぎていた人たちが
目を止め関心をもつ
並木通りへ変化

取材に伺ったこの日、山大通りではけやき並木の肥料やりが行われていました。参加した4名のメンバーは、県の担当者から肥料の特性や使用方法など説明を受け、早速手分けして作業に取り掛かります。一本一本の根本の土を軽く

そのような作業に見えても、何本もの木々に向かっていると、額にはたちまち汗がにじんでいました。それでも愛しそうにけやきを見つめ、テキパキと作業をする皆さんに道行く人も自然と視線を向けています。参加されたメンバーの一人は「自分達の住むところを守り、育てていくことはとてもやり甲斐があります。常に綺麗にしておけば汚す気も起らずマナーの向上に繋がると、こうして作業をしていることで、道行く人にも関心をもってもらえるから」と誇らしげな笑顔。清々しい皆さんの表情の中には、まちを想い、人を想う温かい気持ちが溢れています。

「面白い」と「健康」を
キーワードに
住民と大学との交流を

今から約40年前、山口市平井地区の住民の皆さんが、田

畑を流れる九田川をきれいにしようと結成した「平井を明るく豊かにする会」。もともとは川の清掃を活動内容としていましたが、準農村から都市化へと地域コミュニティが変化したことを受けて、より時代に即した新しい取り組みも行われるようになりました。

同地区には山口大学が位置し、アパートの戸数は約8千戸。ここ10年でその数は2倍以上に増えました。一軒家と違い、アパートは自治会との交流が薄いのが特徴的で、学生アパートに至っては市や県、



30数年の歴史がある九田川の清掃作業。

選挙関係の広報が届かないところもあるほど。10年前1ターンの山口にやってきた現・同会専門委員の平松さんはそんな状況を見て、なんとかしなくてはと声を上げました。「せっかく大学が同じ地域



専門委員の平松洋之介さん。



英学村での自治会自費

地区の子ども達を呼んでのクリスマス会も行われました (英学村)

にあり、たくさんの方が住んでいるのだから、もっと交流を持たないと勿体ない。職業や年齢を超え、地域全体を巻き込んだ交流の場を設けたいと思いました

希薄になってしまった地域交流を促進させるべく、会の中で2003年に「平井笑学村」を開設。年間7〜10回、「面白い」と「健康」という誰もが興味を惹かれる2つのテーマに、大学や行政から講師を招いた講座や大学生による歌や落語、自治会自費など多彩な交流プログラムを行い、地域住民の繋がりを深めています。

**まちの玄関となるような
風格のある美しい道を
つくりたい**

そんな活動の中でも同会は近年力を入れているのが、山口大学正門から湯田温泉方面へと伸びる山大通りのけやき

並木を文化遺産にしようという大きな試みです。

街路樹は、高度成長によって公害や環境問題が深刻化した1970年代以降、道路の騒音や排気ガス対策として全国で積極的に植えられました。しかし、成長した木の枝葉は、信号や標識を隠し交通に支障がでたり、落ち葉が近隣住民の悩みの種となるなどさまざまな問題が持ち上がり、毎年大幅に枝を剪定されているのが実情です。山大通りのけやき並木も例外ではありませんでした。



大幅に剪定されてしまった木。

「道路はまちの顔です。住んでいる人を癒し、訪れる人を歓迎するような景観をつくりたい。幸い山大通りは電線も地中化されており、歩道も広いので、木を伸びやかに育て、美しい並木通りをつくることのできるのではと考えました」と平松さん。

この想いに会のメンバーも賛同し、取り組みを開始。県や大学と話し合いを持つ中、沿道の住民や事業者にもアンケート調査を行って意向を確認したところ、ここでも多くの賛成を得ることができ、まちぐるみでけやき並木を文化遺産にする活動へ乗り出しました。



美しい紅葉が目に鮮やかなけやき並木。



自転車道も整備され多くの大学生や市民が行き交います。



いきいき仲間たち



けやきマップには、四季折々の写真も掲載

行政、大学、事業所、
住民が一体となって
景観文化を育てる

風格のある並木通りとはどんなものなのか、またそれを育てていくにはどのようなすればよいのか――。

具体的な構想を進める上で、まずは現在のけやき並木について理解を深めなくては、会では地域の子ども達や山口大学の学生にも協力してもらい、けやきの位置や本数、状態をチェック。けやきの木、一本一本すべてに番号をつけ、沿道の店舗なども記載した「けやきマップ」を作成しました。マップは、平井地区全戸と公民館、山口大学などに配布され、今後それぞれの木の世話人を募る「けやきのオーナー制」の実現を目指しています。また、2006年には県の推進する「やまぐち道路愛護ボランティア」支援制度のモデルボランティア団体に登録。2007年度には「協働で創る景観文化」事業で、市の「市民活動交流事業補助金」に選ばれるなど、公的機関の助成金を受けながら、ワークショップやシンポジウム、講演会など積極的に活動を行っています。

取材メモ

●「平井を明るく豊かにする会」

1976年設立。山口市平井地区13自治体1,100戸が参加。

平井地区を流れる九田川の清掃活動を目的に設立。その後、地域住民の交流をより深めるために、2003年より「平井笑学村（しょうがくむら）」を開催。「笑い」と「健康」をキーワードに、社会人や学生も交えて、さまざまなプログラムを行っている。基本になる構成は面白健康講座、自治会自慢、大学との交流プログラム。平井地区13自治会がそれぞれの公会堂を持ち回りで行う。

さらに2005年より、山口大学正門から秋穂波瀬橋までおよそ1キロに渡る「大学通り」のけやき並木を文化遺産に育てる事業に取り組んでおり、環境・景観に関するワークショップやシンポジウムなどを実施している。その他、道路や公園の清掃活動など活動は幅広い。

「ひとりの力では限界があるけれど、みんな協力すればできないことはありません。行政、大学、事業者、住民と地域がひとつになって、今後美しい景観づくりをみんなの手で進めていきたいものです。景観は時間が蓄積されて形になるもので、箱物のようにパツとはつくれない。私たちのしていることは景観文化を生む一段階だと思っています。これを次の世代に託し、

時代のプレゼントにしたいんです。」
ここをモデルケースにすることで、市全体に景観文化が根付いていけば…と語る平松さん。
20世紀から21世紀。そしてまた次の世代へ。「平井を明るく豊かにする会」の世紀を貫く活動は、文化のまちづくりの『しるべ』となり、未来の山口のまちを輝かせています。

